



朝本

醉菩提

夏

3047
8



稲妻表紙後編本朝醉菩提後帙中冊

東武

醒醒齋山東京傳譯

醉月堂

因幡



百蟹陀羅尼品第十二

當時小山三母子河内國へ落つんと。金剛山の山越えしに。小山三
 山住乃人家と云ふ林て。明松とりぬ。母の手とさう。腰とおし。さ
 險阻の山坂と心がそくもたごりゆ。をがぬ乃時乃旅する。あまは。従者と
 召具して。馬駕籠にも。かぶる。いへて。おし。落人あま。手ぢく。まわりし
 一袋の金と懐よせ一の。あて。腔中草鞋乃用意。だに。あ。唯著乃まの
 親子づき。きのふ。ま。人と。比ま。む。夢う。と。あ。ま。を。かり。あ。て。く。る。栄枯。ハ。當。手。と。
 め。く。と。う。も。も。や。ん。ん。母。へ。子。の。顔。子。へ。母。乃。顔。を。見。あ。ひ。て。歎。き。け。り。
 蛸手にけりる山路乃草葉乃露と分迷泣く。や。て。金剛山と。後。條。峯。との

木月年書是...

岩小尻いわこしわけてやまのひつ物語ものがたりなれ小山こやま三母子さんぼしこれとて大おほい驚おどろきさる
 悪獸あくぶ小出こであらざるこそ幸さいひなまきとて火ひとかりて明松あきまつよろし。麓ふもとは下る
 道みちとくくすて別去わかればわらびて山やまと下り。河内領かちのり森屋村もりやむらといふ所ところ
 つまける時とき夜よいぬぐと明あけ小多こおほ小山こやま三の勇氣ゆうき烈げつき若者わかものなまきとて
 すじしもやままきとて八重垣やへがきの弱よわくしき女をんな乃すなはちの殊こと更さら十分じふぶんの
 愁うれあるうふ嶮いそ岨せ乃すなはち山やまと越こぬまを。身み体たい大おほ疲つかて今いま一ひと歩あひもまきま
 ざれば。此村このむら乃すなはち旅舎りや小こ結むす。飢うもまきまきとて先食まきまきとりし。人目ひとめを
 去いのぶ才さいあれ。おくまきまきとて小座敷こざしきとかりて少すこし間眠まどゆくとて母ははを
 臥ふしちるるが八重垣やへがきのころづ乃すなはち愁うれは目めもあつど。主君しゅくん乃すなはち為夫ためのよと
 口くち念ねん仏ぶつととあふふのころ。小山こやま三さんも唯打ただちあまきとて居ゐりける。
 備ついで此日このひしる春雨しるふゆ降ふりて。時ときあつぬ連日れんじつの大おほ雨あめとまきまきとて小山こやま三さん

母子ぼしの立出たちだり。此旅舎このりやは逗留どうりゅうして居ゐりし。大和川やまとがは千早川せんばがはと始は
 此途このち乃すなはち川がはぐの水みづまきまきとて往來りやうらいあり。ざれば前後ぜんごは道みちと失しひし。
 旅人りやうじん等ら皆みな此村このむらの旅舎りやまきまきとて。つぎの家いへも所ところせれまきまきとて。麓ふもとの
 小山こやま三さん乃すなはち逗留どうりゅうせし家いへに由よし旅人りやうじんあまき。宿やど皆みな去いる日の徒然ふんげんと宛むかて。
 慕こ象しやう戲ぎ雙陸すわうりくはのろもわり。曲まが小歌こたをうとて。今井いまい籍せきの鯨くじら
 と看みるは像しやうは價あひ乃すなはち高たかくまきまきとて。酒飲さけのみて居ゐる角力かくりき腰押こしおしは真まことなる。
 あり。越こ中立山なかつちやまの地獄ぢごく話わたり。熊野くまのまわりの幽霊ゆうれい乃すなはち。さし。は。あ。ま。き。
 物語ものがたりまきまきとて。早はやか。まきまきとて。さ。し。は。あ。ま。き。と。て。小。山。三。母。子。の。敵。方。乃。
 追人おひてとあされて人目ひとめとあ。まきまきとて。あ。ま。き。と。て。隅。乃。小。間。乃。所。破。と。
 屏風びやうぶと立たま。ま。き。と。て。才。と。ひ。ま。き。と。て。音。と。あ。ま。き。と。て。居。り。ま。き。と。て。五。日。乃。
 雨あめ中なかつ川がはぐの水みづまきまきとて。落おちし。と。あ。ま。き。と。て。還。屈かえりま。小。倦。疲こたへ。乃。旅。人。等。

大は嬉しと立回りと出立と一と此夜の皆く初夜より打尉て
 物ぶつりあきむ小山三母子も睡ふつさるるに良ありてあまの人の
 叫声まえなれば八重垣も小山も睡と醒し何まゆやとふ所よ
 狒々おどりかれえよ追来いとひて嘔嘔て逃来るかの悪獸家毎よ
 飛入て人と湯散一踏倒しあぐりなれをあかおろしやとひて旅
 荷物一ツ小ニ三人もつらて我が人のよと引遇つ逃るあり狼狽
 て兒とさしまに昇負て走るもあり旅刀と鞘をうらせておのこ
 手足は痺つるもあり湧せる茶の湯と踏轉して自身上と焼も
 あり此一村は宿する旅人爰は住男女等も皆一同小我先とわその
 て蜘蛛の子と散をが如くに逃出れる足弱の老人女童も踏倒して
 氣絶し或泣きけりやとあつる人ども多く金剛山の方へ逃や此時

小山よ母八重垣が手とらて逃出たるがやうう人かきあつて
 おころかりて操立たる小山と母と引合る手と放され八重垣の
 ついに小山と見失ひ心あつてもと独走りぬ原此金剛山乃山口小東西
 二條乃道あり逃去者皆二分の二西乃道は馳上りたるが狒々へ人乃
 如く不立大手とひらけて西乃道小追上りぬ此狒々は是実乃狒々よ
 わるむ是乃提婆仁二郎あり前は泉州塚と立退て后此辺にわくは
 住山賊とありあまの乃手下と養て専往來乃旅人とあまひたる逃此
 此辺乃山は狒々住て折く人里ふとつるといふまは熊とす熊乃皮を
 つて里合せて身にまといおそろしき面とわけて赤熊とらる狒々の
 形は打扮てあまの乃人と劫山中におびたれごとく賊となさん悪計
 あり前小浪花と逃去し男達乃悪漢石仏乃苔九郎牽堵壁の



食らう人佛と

不破伴作
名古屋山三郎妻
八重垣と書くと
二代の饅頭と



まことの
ひとと
ちがひ
ある

不破伴作

八重垣

露助枕飯の犬平太手向の水右衛門骨桶の白平等が輩も今へ提
 婆が手下の賊となり。此夜提婆が下知とうけ。此山中の足場は所
 待うけ。逃来る旅人と害して衣服路銀と奪取其屍へきて谷川
 踢かきぬ。されを此道は逃上りし者へ皆害せしむ。諸提婆
 佛々の打扮の俵にて此所へ来り。手下の者等にはむいてしつ。ゆ
 此は来る者もあじ。汝等の先此奪うる物とかれ家小運再の村
 中。逃来る者乃空屋へ入て財物とうづべし。我へ今志づく。此
 わりて。若かかれて来る者あつを剥取べし。手下の者等へ奪
 する物とさぐきて。山越かかると家に飯りぬ。提婆は若小尻うけと休
 てぞ居より。爰又此河内國讚良郡中野村の酒賣亦六
 とり小負者の父。禰師の亦介とり。者あり。年へ六十歳はわす

老人あり。彼一つの感ざる変わりて一念発起し。殺生の業をやめて
 回國し出諸国霊場と巡拜し。三年をかり旅にあり。一旦古郷
 へ飯らると此夜此村に宿し。これも佛々とおそれ。笈の皮篋と小服
 小抱て逃出老人の足弱され。人におかれ。佛々へ後より追来ると
 のころろろと。此西の道は馳のかり。おのれもくけど。提婆
 仁三郎佛々の打扮をせむくと立居より。これと見たり
 膳とけし。あなひな。またをけよとさきひつ。地上は合破と倒
 提婆は立寄て亦助とあ殺し。衣服と剥んと上結の月うけ
 うく。これに垢づき。古衣服され。ちくち骨折し。とつぶさた。笈
 の皮篋と取て見ると。背の方の木札は河内國の任人禰師亦助
 と昏つたり。これも軽くなれば。此裏にも物あるは。とあひて投捨す。折

大月年...

狩人大勢明松とあり照して馳来り提婆と実の佛々たるの箭尻
 とそつて取圍りしにぞ。さうりの提婆も箭前をなす敵一がく後の
 茂林の裏へ逃籠るれば狩人等の跡とあらみて追中たつ。かくるれば
 西の道は逃る者ありあつく害せしをまねかまざる者ありあつり東の
 道は逃る者一人も恙なく。八重垣も小山云と見え失ひて。独東乃
 道に逃のりたるが足とをこえ疲て古社乃前は倒伏息もたぢけ
 みて唯小山云が夏と氣づひて居る折しと。むしらの山間は明松の
 光りひらめいて。捕人とわがりと武士大勢出来り。八重垣と見つけて
 立ちまゝ。明松とさうつけて其為体と見せしむる。つねに女汝三本傘
 の紋つけたる衣服と着たる。名古屋山三郎が妻にうさぐさの。我
 輩は雄川大領の良等なり。汝等母子森屋村は宿居し。註進の者

わりて汝等と捕へんさふ行道あり。此所にて出會し。汝が運乃
 盡ありとて。繩と取出して高小手にらるるわげ。さうひても汝夜中
 此所に来りし我くむし夏と知て逃ゆん。さうり小山云のつづ
 にもぞ。ともにかくめて率てゆん。のりうとくぞ責りる。八重垣は
 去りし人もせざりし。わづいしめらるるうへ。のりることもゆるさう
 ところ我者へのりる。泉るとも。せめて小山云が月と。て夫の遺言
 と。遂にむべしと心と決推量の如く。妻の山三郎が妻あり。今夜森屋
 村は佛々出て騒動。此所迄逃来し。が。兒子小山云の妻しり。さうに
 出されば。へと知ぞ。さういよ。捕人の者どもこれと。小山云と汝と
 捨ちて前に走らざる。これに。安夏と。いひて。ついで。連打は打
 られ。憐れ。八重垣の氣と失ひて倒る。つねに。松林の裏は。大に

笑声まこゆると等しく。飛礮とらうくと打出し。樹木欬くとあり
 ぞらみ。暴風颯と吹て實の拂々わつり色いで。捕人等と目掛け。猛勢と
 なして飛びまぐる。みど。捕人の者等。膽をけし。八重垣と捨あてて。
 りと来し方へ逃ゆれぬ。拂々へあ不其跡と追ゆれり。八重垣の志なく
 驚き生るころとせざりしが。やうく人ごらつて起あがり。自己
 へ縄と松の木に摩つけ。つらうじて摩断つ。ぞろく胸をあらで
 ありして此のまに後の方へ逃飯らなやとあひくる。呀。背後の古社乃
 扉をさとしりきりて。浪人とあぶらした。了角乃若者。両刀と帯てあつく
 と歩出月にきりりく。氷の刀とをらうくと抜て背後より。八重垣が
 肩尖と四五寸をわり斬こらぶ。あやとさひびてのけさぬ。又倒さしりり
 かのを若者。古社の椽さたふ腰とわけて。八重垣が苦む。体を尻目にうり

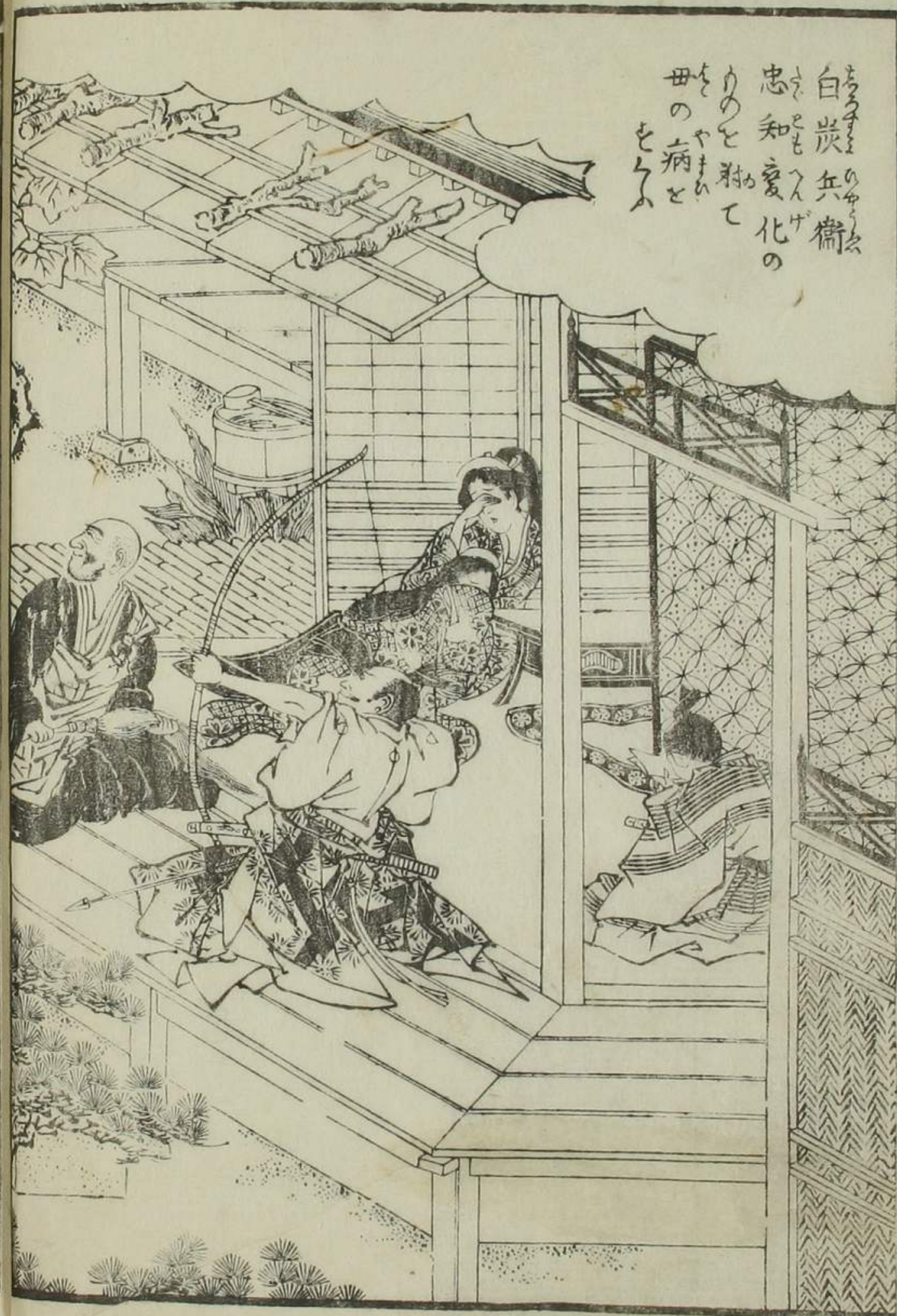
笑とあくし。面とぬい。の者との月とえざりたり。八重垣のやうくと起より
 ける。肩上の鮮血の朱に染り。元結ききて。乱れ髪風の柳。又異あうと。
 逃んとされど。足と袖と。あまト所と這まら。苦き息と吻とつらき。
 そらふさぎあて。山賊さうら。物りく。あつて。我身にわらふ。著物の残らぞ
 そらふさぎあて。今をわらうとをけてよ。兒子のいづくへ。あたるぞ。我と尋て
 迷居ら。せめて。一目あひさやと。麓の方のあがりて。倒伏。逆も助ぬ
 命を。見子に。一目あひ。間まら。の時とのどろりて。慈悲とあきけぞ。
 これのうと。掌と合て。このまに。向ひ七轉。八倒。苦痛乃。悴。こらぬ
 びらうに。泣きけ。谷の水音。松の風。いぞ。哀とそえに。り。曲者の血。刀
 提て。立ちあ。八重垣と。足下に。ふまて。踏ぬ。目と。むきり。り。と
 声あう。あか耳か。し。ま。う。ま。い。と。山賊さうら。の。奇怪あり。と。て。も

殺奴をれを冥途の土産に語すらん我は是不破伴左衛門が第番作
 といふ者なり社の裏ゆて今宵は汝の名古屋山三郎が妻なるよし。兄
 伴左衛門山三郎が為小草履ゆて打擲され其遺恨をささぐりて
 結句彼が為小打是とれを遺恨は遺恨をかきよる山三郎一太刀
 恨て兄が修羅乃妄執をささせんと思ひし所前の日雉川大領が為
 打死せしとて本意ありおのせめて汝等母子と手にけりけりさう
 恨とさうさんと汝等がゆくへとさう。此山中めて申た暮さればか
 社に宿せし所をひけりけり汝はあひしんこれ天の命ありさうと小山
 めも此辺に居るらん彼奴をささぐり出して我手にけり。おとかし
 地獄に追やらん汝の前は此處と去之途の川は待合て刀山火途の
 死出の旅親子に手にけりて。おれは方へけり。悪口雑言言

つ。さめぬさんさう折しも再又暴風颯と地ととりてかの悪獸
 捕人の武士と左り小提て腕と引抜食ひ鮮血流を口とひり。結句
 よひぐく大声に呵々と笑てさうに飯来るも。番作の膳とけし
 こめをささぐり周章まよひて逃去ぬかの獸の旧の松林の裏にへり
 諸小山の母のゆくへと案さうひり。彼方此方と尋速てつひは
 此所は来り地上は流る血と見つけてり。おれはあやうをささぐりて
 母の八重垣倒居されれば大小驚き抱起とに凍手と負し俵され
 らり。つふと仰天し。耳のわらうふ口とさうせ小山三郎の母人
 らかをれを八重垣の息吹りて目とひり。何小山三郎の死目
 又一目あひしんとさう念がささぐり。おれは汝と見失ひ心あり。さ
 此道は逃来しに圓貫が追手の者我と捕へて。さうはけり。立行を



野晒悟助
 木乃
 太刀
 持る



白炭兵衛
 忠知変化の
 りのと射て
 母の病と
 とく

あつる折一の悪獸をまりて追手の者を追ゆたし其間
 逃去んとす所はかしの古社の裏より不破伴左衛門が
 番作
 とす者ありしに我はかく涼手を負せと逃去し追手
 拂々と云ふ此所は長居し火災あり我はとてとて今
 うと立去て父の遺言をまのこしとつて此の各
 まつ山寺の鐘に非常と告渡り黄泉小入る夜嵐
 水もあつて溢りて苔の露草の時鳥血を吐てかく
 母れりて麥藁根小入花雲に入鳥も哀と鳴をえて
 の別霜きててさうさう小山にむす骸とせりつと
 父とつひ母とつひ乃間小打續てかく非余に死し
 宿毒の悪報ぞと悲嘆乃涙小むせりてと色にき
 此とあひけるへ番作め遠くいぢ追つて母の仇と報り
 いそぐりく傍辺の地と穿かりに死骸と葬て天地と
 ちりくあんと念し終て刀と抜地上に立て倒し方
 と刀と鞘ととさるる裾をさうてやんとし折しもの
 裏より飛礫とむらくと打出し其飛礫小山に額
 目らめれ忽氣絶して尻居は撲地倒し時拂々わ
 一掴みせん勢めて飛かするが不思議あるか小山
 発し。拂々の後ふらりとありてすまゝ居たりる
 ありて起上る小拂々又むら来りたる刀とをさ
 まうて斬つけし。拂々のあつてきて鼻とをさし
 怒る不飛かする。小山に懐中しりまをく光と
 発し。拂々のあつて

此とあひけるへ番作め遠くいぢ追つて母の仇と報りめとあひける
 いそぐりく傍辺の地と穿かりに死骸と葬て天地と葬し敵の行方
 ちりくあんと念し終て刀と抜地上に立て倒し方へ河内領初彼方
 と刀と鞘ととさるる裾をさうてやんとし折しものわは松林乃
 裏より飛礫とむらくと打出し其飛礫小山に額よりあつて
 目らめれ忽氣絶して尻居は撲地倒し時拂々わらへは出小山を
 一掴みせん勢めて飛かするが不思議あるか小山に懐中しり光明
 発し。拂々の後ふらりとありてすまゝ居たりる小山に正気
 ありて起上る小拂々又むら来りたる刀とをさしと抜放し力
 まうて斬つけし。拂々のあつてきて鼻とをさしし牙と齧て大
 怒る不飛かする。小山に懐中しりまをく光と発し。拂々のあつて

形体すもそののさぬに盤石と倒さるる。地ひきて倒れれば小山の
佛々に糸のりて。胸さうと刀と刺通しるに佛々へをさしき
声とあり大よさひびて死しあしぬ小山之懐より光と発する百蟹乃
巻物と懐中せしやるる。小山への不思議は此悪獸と殺し諸人の
災とのぞけし。其今にもあぬ名画の奇特と感嘆し。母と埋し一所と
拜して念仏と多人。河内領の方にひいて走りぬ

○そも此百蟹の巻物とよへ巨勢金岡唐代の名画韓滉とよりの
玄宗皇帝の勅けりて画する。百蟹の旨はあひてのさる一軸あり


此繪は奇特あり。其前編箱妻表紙とくく記せり

○彼不破番作とよへいまだ了角の若年あり。不破道大が妾腹の児也
原濱名入道に仕へし心ざぬわさやへいさるとありて浪人

一所不住に漂泊せしとぞ

○森屋村の者等らつらの佛々に欺るる。夏と當地の縣司小告寅し

これ其賊のありくはきびくく提婆が手下石佛の苦九郎以下
五人の者と疎を捕へて誅戮しる。提婆は逃て行方知もあらず

弗多羅  瓜茄隨喜功德品第十三

夫の扱お死愛に又白炭兵衛忠知の妻へ前は女子と産てむどかく
こまり。其娘生長して今年十七歳に到名と夕露とあひる。容貌美く

万夏にかいらして心をもやきりりされ一人の孫とて祖母の寵愛
浅うむ。掌の上の珠の如くにあひるに。偶風のらちとて打卧漸々

にかり死病とありて。つひにさうありにけり。常を死すのさがるれは。乃
父とまらぬあひのるる。むねど。ワグらに十七歳と一期して。花の

召びておべーと多の忠知のうらと待侘ぬ。つくて又一月をうり過るに
 老母らちわーきまそつりそるに臥漸々に病まうりて惱るべ老臣
 穂波垣右清門と始りて家内の者大に驚良医とえりてむうて療治と
 らくくれども落れども其験又之が是を老年の大病とらりてなく
 らひ穂波佐助と飛脚と一と都にのむせ此更と忠知は告りたり。らの
 文字摺の昼夜病床ととるれど懇に看病し。外の侍女らに深夜は
 べ疲て睡ぢらるれども文字摺の少も睡ど介抱し心とそしぬ
 備忠知へ東山殿のおがしりて多の都にまづく逗留してわうるふ
 佐助早馬あてうけつけ。老母大病のよと告りたり。忠知は孝心
 深き人なれば大に驚き差政公に其ことまきこえのむけていとぬとさぬり
 早駕籠ゆて宿所は飯り旅袋束の俵母の病床は逆つき容体とつり

見るといつまかありて見えてくれむ。愁る更限あり。衣服と著うえて別間よ
 出垣右清門と召て医療の事と談し居るに取次の者まうりて。母と
 病気の歩足舞とと。蘆屋里の何某方よりさし上る。折櫃の蓬餅
 煎餅灘浦の塩焼の翁のれよりさし上る。真一折海苔一臺水無瀬乃
 下司よりさし上る。養老酒一陶。白砂糖一壺。伊覧あまべーと披露して。
 目通りにあうづれば忠知はうれしと見せり。運おしめ垣右清門
 よむ。母のうらにありて看病する女に何者ぞとつづぬ。垣右清門
 うらうらにいと其子細と物語る。忠知とんと彼我彼女は逢金一交は
 連来きとよぬ。垣右清門か。こまりゆとそ彼所より父の文字摺とつきて
 出来りるに。文字摺はく手とつて居りる。忠知はれとつて
 見て。いつまか七ぬ。娘はよく似たりといひて。つづして見居りる。折

化助まうりつで。母公涉病氣のおん足舞とて。一休和尚は出にひとらん。
 文字摺はこれとばとひとく色とらしあひのてまひらご次の間へ逃行ん。
 〇忠知手おやく文字摺が襟首つとて引かそ。ひる所へ一休和尚
 野晒悟助と具して入来りぬ。文字摺を此と涉覽して。汝畜生の才少て
 何とて人よ交るぞと喝しぬ。文字摺へ髪より乱してとくととら。あか
 くらとや。殘念や此家の老母と誰惑り。夜みく毒氣とたまきけり。
 病人とほ。つひぬ。一命ととりて忠知は仇と報んととら。に。変るふ。
 一と足ぬらんされ。無念さよとく。里面色変て齒ぐをな。忽
 明障子と踢破て虚空とて。飛上る一休忠知はむら。たやく彼と
 射ひとのぬ。忠知のひて射術の達人あれば。とらえいとひもあんど
 書院よおたつ。弓ととり。箭とて。撮さふとら。り。で。虚空はむら。

漂と放つ。其矢あやまごど變化のりの胸さうを。篋深に。と。射通る。
 やがて地上に撲地と落し。一休野晒は下知しぬ。悟助庭は飛下て
 これと押へる。これ大なる古狐也。矢はつぬれて死し。りけり。
 垣石湯門。仇助親子と始家内の男女これと見て。唯のたき。を。うら。
 時小忠知は。某過。比泉州堀皇子の化地藏と斬る。と
 あり。察する。所此古狐の地藏は。つとて往來の人と悩せ。る。疑は。
 某に斬する。仇と報んとて。娘は似る女と化し。母と誰惑。て。病全
 あり。する。あ。ん。身。うち。に。あ。つ。ど。疾。あ。る。と。り。み。に。も。悟。助。狐。の。身。上。と
 わ。く。ら。あ。る。に。果。し。て。首。の。き。ん。小。疵。の。瘡。さ。わ。り。を。一。休。打。う。か。つ。き
 さ。と。そ。の。あ。ら。れ。と。の。ぬ。ひ。つ。彼。方。に。と。を。る。と。る。進。物。の。ま。み。ぐ。と
 足。中。り。ぬ。其。物。と。これ。へ。と。て。と。ら。を。て。の。ら。く。に。見。ぬ。これ。一。つ。と。

正真ちんじんの物にわらむ。且此折このまの裏うらとひくまひん。打うち見みひん。とさす。ぬ
 蓬餅ほうびんと見みる。とさむ。これと庭にわの泉水せんすいに捨て見みる。とさす。とわのせけまを。
 仕助しすけ立ての折まと取と泉水せんすいに打うちわけ。一件いっけんの草餅くさびんもか青蛙あせりとありて
 水中すいじゆうに飛と入いぬ。これと皆みなく膳ぜんとつぎ。一休いっしゆうのさる。やそれのにわらむ。
 此煎餅このせんびんの折まとひくまひん。此煎餅このせんびんの折まとひくまひん。とさす。ぬ
 とおせけるに。ひくべ秋あきの風かぜの散ち散ちの葉はの黄色きせきあり。桐きりの朽葉くちと
 まどへ。灘浦なつらの海苔のり一包いっぱくとひくべ。これもあましく落葉らくえつの塵ちりと吹ふ
 とぢ。土蜘蛛つちぐもの巢ねあり。巢ねと見みえ。朽木くちの根ねめて。一陶いっとうの酒さけの種たねと
 飽あ氏し。とさす。雨あめの降ふる。りのり。残のこりあり。一壺いっとうの白砂糖しろざとう
 と見みえ。一いっの芥川かいかんの流ながの細石さいせき真ま白しろ。砂すなあり。人ひとぐ益えき驚おどろ。一休いっしゆうのさる。
 是こは妖狐ようこのまらさる。此妖狐このようこの泉いん列りつ植う尾山おしやまの巢ね七層しちそう峰ほうの岩い窟くつは

年としのさく任しんおのれ。年とし数かずと経へま。さる。妖魔ようまの通つう力りきと得えて。こまま。く
 わま。この人ひとと害がいせり。忠知ちゆちどの。弓勢ゆんせいにわらむ。い。う。ぞ。射やお。こ。と。わ。ら。む。
 諸人しよじんの災わざと。のどま。と大おほ功徳くんとくあり。老母らうぼの病やまひもやぐ。快気くわいき
 わらむ。このさまへ。忠知ちゆち。今更いまさらも愚おろち。人情にんじやうの变化へんげ
 と察さつ。あ。の。と。あ。ら。む。妖魔ようまの気きまで。や。先まへづら。て。知ちせ。あ。あ。ら。む。こ。ま。ま。
 禪師ぜんじの侍しやく陰いんに。と。さ。る。妖狐ようこと母ははの。一令いっしやうと。と。さ。る。一危いっけいは。し。こ。と。あり。と
 と。一垣いっけん右邊みぎへ門かど仕助しすけ親おや子この。一休いっしゆうの神通しんとうと感かん。と。さ。る。や。て。老母らうぼの
 病やまひの日ひ々々に。お。と。さ。る。つ。ひ。に。全快ぜんくわい。小この。さ。る。忠知ちゆちと始はじめ家内けいだい一同いどうは喜よろこぶ。と
 借程せつじやうあり。孟蘭盆もうらんぼんの時ときに。七しち夕露ゆふつゆが。七しち冥みやうと。さ。る。新盆しんぼん
 され。と。老母らうぼの神かみの。ひ。あ。て。一休いっしゆうと請待まうたい。と。さ。る。一休いっしゆう来きり。た。ま。ひ。霊柩れいこは
 と。さ。る。牛馬うしうまの形かたちは。造つくる。瓜うり茄子なすと。と。り。て。手向てむけの水鉢みづはちは。打うち入いる。

札つみ小こす多おほく點く一いのいのいのい經きやうとり讀よめしともかく音ねとかり耳と
そらふことこては居いるふ一い休やす拂はら子こと打ちつてのつままく。

山城やましろのい瓜うりやあ茄か子ことあまくにあ手て向むけすやか茂しげ川がのみ水みづ

とあをとほつこれはては回ま向むすまぬと。他たのこと詞ことばいまくく飄ひら々ひらとしてあらひぬ

忠ちゅう知ちのもと本もと領りやうへあ山やま城しろのう鴨かひ河がらんがかくのをそらうらるとあんん此この歌うたのい意いと

知しるもの者もののい忠ちゅう知ち一ひと人ひとあままむ。亡なした娘むすめ佛ぶつ果ぐわと得えんとまかいぬとまかいぬとまかいぬ

ひらすす喜よろこびけるとうや

伐た那な婆は斯し



生死流轉藥草喻品第十四

これの前まへのい佛ぶつ々々のい所ところのい物もの語ごより三さん年ねん前まへのい夏なつあらるが河か内うちのい國くに讚さん良ら郡ぐん

中なかつ野の村むらとりのい所ところにい酒さけ賣うりも六むとりのい者ものあらり。幸ふすがらては養い男おとこ少すく年としのいあらるが

若わかかりる父ちちのい獵あ師し少すく亦また助たすけらるが。老おきな年としにいらるまで殺ころすと業わざといらるが

一いつ年ねん雌め雄おとこあらるがび居る雁と射て。其雄おとこ鳥とりのい頭かしらと射まりらるに取こ

えとこの頭かしら。次つぎのい年ねんあらるが野のあらるが又また雁かりのい雌め鳥とりと射てこもと見るよ

翅はねのい下したり鳥のい頭かしらと抱て地上のに落ぬ。おそらくは是こゝ去こゝ年ねん失しひ雁のい頭かしらと

其その妻つま鳥とりのい放はなしてあらるが。それを射て殺せし無む慙ぜんあらるがと

あらるがとあまりに悲愛あいのい情なさけと感と忽一いつ念ねん発はつ起き一いつ年ねん来きた殺ころすと罪つみと

滅めつせんとも諸國こくにのい靈たま場ばと拜めらるが。とて旅たび立たり。兒子こ亦また六むとり

いままに定さだむる妻つまもあく獨留とどましてららしるが。あらるがては小こ酒さけと商とらるが。

とらるが酒さけ桶かじと荷て近ま村とと賣うりまらるが

よびましけ。此も冬のい半かたあらるが。一いつ日ひ例れいのい如ごとく荷とらるがては交ま野の邊へ

まを酒さけ賣うりにゆりに途中のに鹿笛の七しちとりのい狩うり人あらるが。あらるが亦また六むとり

より所ところであらるが

今れもぬまきど。とても償心うへ縣司ふやし告てとるまきり。しど我と
 とも司のりくゆくべーときびくくへ狩人しり。その極て理あれど
 此れとい雪あぐく降て野山のそくまも自由きど。うは獲物も
 多れゆえに心の外ふおそるぬ今四五日過まば此方に銭と得る
 心ゆてもぬまの今すじ待くれられよとくへ亦六の頭とふり。ゆめく其
 ころりもあわれぬ。ゆや片時も待ごり司のりくくくといひは
 手ととへて引立ゆんとあきりくれは狩人の迷惑。まわつて今様は
 まへまきり。その我生業の道具は。まべーもあきてりまきり物あれども
 当分の質として此鉄炮は小道具とそそてわづけおへー四五日の
 うちに借銭と償うけをそべくれべ。これあて了筒とのむまりとといひ
 亦六の夫いおがらうるに約束どといひてあけけいられは狩人のしり

四五日のうちにうは銭と得心ゆてといへ別の更にもわくど。当月廿七日の
 春日の侍神更ゆて。賛の雉千二百五十六羽と年々此近國よりすむる
 更も。今年へ當國其役まわらう。國のかもと仰わらへ何者にわれ
 雉一羽とさう上る鳥目五百文づゝなるべーとの更あり。彼禁野の
 雉あきくすむといふとあんれも知ごら。殺生禁断の所ゆて常これと
 ともこのゆきど。春日の調進にをかりへとも。これゆきとすまら。ゆきよ
 我く仲間の者ゆいあせ。近日の野の雉と追り。一網は打ゆて
 あかこの銚とたまるべーとるべ。五貫の更あり十貫ゆてゆてゆのひ
 かくゆき。ゆにこれともあがらう。あひゆきとゆき。亦六うかづき。まきりにま
 けうまき。まきりゆそれまでの質物に此鉄炮とあがらう。あきべーとて立別
 家路とさうて飯道の禁野と過ゆられぬ。ともく此禁野とらへ往古

惟喬皇子此野は狩りありて。金色三足の雉と獲ぬ。ちうじしうのら
尋常の殺生と停めぬ。禁野といふとや亦六ハ此野の半と過る小
遙むへの枯草の裏に雉四五羽ありまると居れば偶ちひるへ。いま
鹿笛が語ると音を春日小調進の雉子とさし上る者あり。一羽は五百文が
ありて。その更なるは。し。う。春日へそむるは。此野の殺生とせしめぬ。
これ天の與へあり。これとつり打りし。錢の恩賞とあがり。とらむ。
素獵師乃子やて鉄炮乃心得ありければ。そのあがり。鉄炮に三玉と
ころ。火打道具と取出し。火と打出して火繩に點ト。その雉と移し。ひ
とありて。火蓋とまれ。忽ち流丸飛て撲的ひ。き。む。つ。と。う。の。煙。の。う。ち。ふ。
ゆかやとさけが声高く。きこ。え。くれ。べ。る。り。と。あ。ひ。て。走。り。ゆ。れ。て。見。て
ゆるに雉ぬ。わ。て。人。あ。れ。べ。と。く。り。に。と。仰。天。一。抱。き。上。き。と。か。い。も。な。く。北。月。骨。

と打きて息とえ。亦六ハ益驚き。此人の体とつらく見るに黄色は
青赤とまどえ。る。小。羽。と。あ。り。て。ア。る。衣。服。と。着。て。う。つ。ふ。り。に
ありて居れば。遠目ハ四五羽の雉と見えしあり。これ醫師の体ハ片目
盲なる老人いと貪りげ。姿あり。抹薬を来るとおがえ。く。袂は
種々の薬草と摘入し。亦六ハ。や。う。これ。え。う。さ。る。更。と。ん。ひ。な。が。り。
親人殺生とやめて。回。國。は。出。ら。せ。一。意。に。う。ら。ひ。り。ぐ。う。の。欲。に。雉。と。獲。と。て。
大。あ。る。あ。や。ま。ら。と。仕。い。う。る。糸。我。り。あ。て。世。も。同。然。あ。り。と。千。度。百。を。
後悔し。若此人の妻子ありて。これとせ。と。嘆。悲。て。仇。と。報。と。あ。ら。わ。
我父り。人。に。殺。さ。あ。る。と。さ。く。あ。や。ま。ら。あ。り。と。も。あ。る。と。さ。く。と。我。も。人。も
其心へおなト。あ。る。べ。し。所。詮。此。死。骸。と。里。は。持。ち。其。妻。子。と。さ。く。首。と
の。べ。て。打。ら。べ。し。我。今。も。今。日。ま。で。の。約。束。あ。ら。め。と。覺。悟。と。極。已。は。死。骸。を。

づらふといと貪まじさぬれど生うつきたる養目容とめはうらつくしく人品ひともまじ
 賤しんかづき女よめあり。あふうかひるに女よめいひさきう泣なるがせありと
 ありの小石こいしとひらひて袂たもとにひき念珠ねんじゆと取出としてさうりし。西にし
 むらひて念仏ねぶつとさあへわらうと洗あらむま様子ようすなれば亦六またむのそびく
 走出いて抱かかり。何なにゆゑかゆるさるまはとあふどとり入いに女よめの最さいをいひ
 り入いり。さうめあはるおん志こころいさしと。さても死あむらうぬあふと
 いへ。えのじして通とるまじしといふ。亦六またむのまじ。若わき才さいと失しつんと
 覚悟かくごとさうらあふれど。よろくの責せあふれど。若わ我わかにかうまふ
 あふ救すけまわさうとあひひと。さうのあふ方かたうさうさうれども
 情深かみまあせうり。さうりのおん志こころとひるさうせんもいひあはれ。一通いり
 語りたごん。妾めかけ、此堤このつとの東村ひがしむらに住者すまひの娘むすめめては老年らうねんの父ちち二十日にじゅうにちより

前まへ小偶家せうぐうけと出いり日過ひがても飯いりゆ人ひとと雇やて近郷きんきやうとあまねく
 さういふども。さう小やうあれえと。貪まさうへに老らうぬさべ。さうて父ちちの詞ことば
 か長生ながせいと貪ま窮きやうれらじまんより。縊かけてあうと死あにまらと。後のち
 かしゆへり。貪ま苦くにせまり才さいと。かして縊かけ死あらうせさうりと。悲かなさ
 中なか方かたた折やるに。家いへと。か。主情しゆじやうた者ものにて少すこの家財けざいと是こゝまで
 滞とどり家代けざい又取とり。妾めかけと。や所ところあうの野の食くに。を食くに。もあれと。中なして
 追出おしゆへ。親類おんちゆもあう立たる。陰かげさうに。あふれせんま。さう。さうり
 生耻せいぢとさうさんより。水みづの泡あわときえ果はんは。と覚悟かくごとさういふと。
 むせあうて語り。それ。亦六またむの心の裏うらに大おほに。さう。此女このよめの父ちち九日くじつ計けい前まへに
 家いへと出いり。と。若わかの人ひとは。あうさうと。さう。胸むねと押おし。あ。あ。あ。
 才さいの死あんと。か。さ。も。理ことわりさう。さう。さう。親人おんひとの生死せいじ。あ。た。う。さ。う。り。

六人 楓の道 鐵匠 醫師 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺



醫師竹齊の
娘於三輪
とてあけん
とを

木蘭亭書畫卷之七

酒賣 亦六
若菜の
永と
なげんと
すると
とめんと
うめんと
と



木蘭亭書畫卷之七

かくしわざらむに寺に布施とありて竹斎が菩提とてむくのやがて打き
ぬとて夜に於三輪と一間ふて一呀は臥て礼儀とてさうど
あしらのぬ於三輪のさめる心もあつて今親とあひせめてさうの
恩報トと。まあやうにさうして酒洗濯針仕支煮焼の業の片手ぬ
商の手つづひし。物書ともよくしつれを日々の帳合算用まで男まきり
用とて。女にまける器用者其のぬに布と織糸と繰て。なりゆきの
さすけし。さうして又さうなれば亦六心にぬる。彼小夫なく我は
妻なし。彼と我と若敵同士にぬる。よに頃あひ乃夫婦あるふと。あて
暗は歎息し。親人帰國しぬ。やがて打き我を身に。あまの恩とさせあを
打ちぬる。夏もやあつんと。よに程のあしらのぬ。かくて程なく此年暮
明年の春の半にりりる。一日亦六か三輪にむく。我父亦助の去年の

今月今日回国は旅立ちぬ。一時百日をり過ぎ飯来べーとのぬひて
出らじ。か巳に九一年過ぬまとも。今にあいて飯あつと音信ぶにぬ
氣づじまきり。今日ハ則発足の日ぬれば。旅されとて。陰膳とを
とくちありと。於三輪のらるえゆとて。つれなく厨をさうして。
陰膳と調トとて。さうじぬれば亦六の父の著る色。蓑笠と壁よ
うけて形代とし。これに膳とそめて礼とほ。恙なく帰國しぬ。しとりの
なれば於三輪い。無事であつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。
めをさうして商物の酒とわく。尾頭つし。肴とそえてさうあり。さう亦六の
愁と私小玉帝と。数盃とさうあけ。か三輪にさうさうさう。酌かへぬ。
時に於三輪軒のつまに燕子のゆれ。さうして。菓の裏に子と育はる。と指
さうして。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。

年若しといひいふが。親一人子二人の涉るれば妻と娶て親人は安堵
さるるが孝ありぬ。妻不思議の涉縁めて情によりて生あぐ。此は
うけし大恩の山より高く海よりもろく不測なるべし。わきの日数過ぬ
と。父竹有の行方今にわしてあさざる。死別はうごがひあるはと
わたりあやういふを。不便なれ我あり。涉るも妻も若あて。死
此家小唯二人住まれば。世間の人のあんなる。呀もいふを。愚るる
まじひの心もあぐ。此上の涉情は事とはしあはし。さあぐ。一生
連る長く涉恩と報むべし。親人の形代の此蓑笠の前めて夫婦の
縁とさあぐ。さる翌日飯りあふともよも憎し。あがを。と
あぐ。さとも餘呀にして。あひこてどきこえる。亦六いこれと。や
あぐ。く。答もせむ。手とさあぐ。きて。點一居る。が。日來義を。く。げ。む

者されども。いなる。過去の宿縁の竹齋が死骸に對し。天地は誓
詞は背き。敵同士の悪縁と。あつて。結ぶ煩惱の絆の端どめ。し。き。
され。亦六い。於三輪。切ある。志に。鉄石の心と。鏢。其詞と。う。け。ひ。て。
俄に。村を。去る。老夫婦と。あ。て。かりの。媒と。し。此夜あ。く。あ。て。婚姻の
盃と。あ。り。父亦。助。が。形代も。時に。あ。つて。蓬萊の。国の。室の。蓑笠と。
い。ひ。と。あ。て。夫婦と。あ。り。あ。わ。ら。は。く。打過。る。が。於三輪。か。あ。る。懐胎
し。と。恙。あ。く。男子と。産。其。子と。松太郎と。名。づ。けて。夫婦の。蜜。愛。源。と。あ。り。
さ。る。か。ど。に。金。鳥。玉。兎の。足。を。光陰の。過。る。夏。流。水の。如。く。あ。て。夢。と。
明。現。と。暮。て。又。二。年。の。春。秋。と。あ。つ。て。過。る。
父。様。立。て。よ。う。と。や。三。年。過。ぬ。と。も。い。ま。あ。ら。は。ぬ。ら。ぬ。れ。ば。老。年。の。上。の。様。あ。れ。ば。
り。旅。中。あ。て。果。ら。ぬ。と。と。限。り。あ。く。愁。々。る。が。一。日。一。人。の。男。門。首。は。案。内。と。い

酒賣亦六どのとヤをへてゆやとり。亦六谷ていうにもこれあつとつて。彼男内に入掘者へ金剛山の麓森屋村の者あり。こゝは又見おれえり。とりひつ皮篋の笈といひてこれば亦六これと取て見るよ。こゝは父亦助が笈めて札に書つけたる文字へおのれが自筆なれば見よ。ついでづりゆわいど。これいひにとかどろくに。彼男つとく。見おれえり。ふらふら。夏と語るべし。かやうくはいと。かの強盗つとりの拂々となりて森屋村と騒ぎを金剛山の山中にて亦助とあり殺し。傍辺は此笈のさそめし。こゝにたつぎに語り。此札は河内國の住人獵師亦助とのさし。ありて郡乃名由村の名もまじりなれば急よ。つとる。このさど。死骸の其所に埋日と経てやうくつとりにさぐりあり。悔てもうたぬ。跡ねんづりれり。おれんと。つとれおれと。飯り。亦六の笈と抱て悲嘆の涙よ。

むせり。於三輪もとも悲にて。かろりのつて。お側に居て。お足と捺介抱し。孫の笑顔もか目。又老後の樂とさせり。いと待し。死別お顔もえざる。嫁舅とく。薄き沙緑ぞと嘆。又時とつとる。さそめ。涙へり。さそめ。ねむ。笈とつとる。とを。おれ。香花と午向は。おこ。懇に吊ぬ。つて。此年。又冬の半とあり。一日亦六酒桶を荷て。商。又出生駒山の麓。ある。平岡明神の社の前と過り。了角乃若侍。嫁人と見え。さる。行疲る。体めて。并殿の欄。又。よ。と。を。睡居。つと。り。おれ。おれ。哉。空中。さる。黒。さ。斑の鱗。生て。尋常。さる。さる。小蛇。ひ。く。あ。た。出。奇。さ。古。を。さ。さ。さ。の。様。人。に。む。の。毒。気。と。吐。ん。様。子。あり。忽。旅。人。の。懐。中。さ。う。光。明。と。飛。一。あ。ま。の。蟹。あ。つ。つ。れ。出。て。か。の。小。蛇。と。追。と。見。一。小。蛇。つ。つ。の。れ。退。さ。て。空。中。に。さ。さ。え。う。せ。蟹。つ。つ。の。の。懐。に。か。ら。さ。さ。る。亦。六。は。此。あ。り。さ。ま。を。見。ん。と。

酒賣亦六於三輪と
不女と妻と一子と
うむ一日その見の
足よ小蛇まとい
雉子飛来しく
小蛇をくらへ



奇異のちひとる一けるにかの旅人へ睡と醒一覺する松子よそと息
 つまそ居る時しも。悪漢等四五人走來りて旅人と取圍今朝跡と
 つけ來一に生駒山みて見矢の本意あかりて。あやうくへとさぐほしど。
 汝が懐中は何やうん金目のえゆる一物のり。さうく添せとらぐつて。
 二人の悪漢對方よりむじと組つき懐に手とさうりつと旅人の腰と捻て
 うやわだた。二人が腕と袖ちあけて莞尔と笑ひ我と若年とあまどりと
 盗せんと愚多う。手をと見えよと。言て左右と一處に投つてまど。のこる
 者ども割木とらて微塵よせんとさう上る。あやこしやあるちとらうと。
 膝臂とのむてかいつつと。わらうと幸び人形磔拍毬の如くはのらうん。
 皆辟易して居る所よ又四五人の悪漢ども箇々棒とひら提て走來り
 かんべ。さたわどらう。物陰に様子をうかがふ亦六が。これと見えよて走出

穂擔とあつらうて立ふさう。素力量をぐさこれ背骨腰骨向騰起も
 うても打たせむせの双方の悪漢寺二人の若者に敵一ぐと折し吹々
 風の木の葉とともになしくと。四方に乱て逃失ぬ亦六の旅人とさうく
 入るに衣服に三本傘の紋とつけたれば。りやそれうとちとらぐて。只今
 のあんらうさき警入らう。沙手練と恭ひくれば旅人の會釈して。おりの
 うけざる足下の助に難儀とのがね過分のいさうと相のおどへ亦六の
 卒尔あぐ。三本傘の紋とつけぬへ。若々古屋小山之君少のいさうと
 うらぬま。旅人の警ていらにも我へ小山之君さう。さうも足下へ何人ぞと
 りんに亦六地にひざなづさ。あん見えうらた苦さう。拙者へ君は乳と上
 乳母伏屋が兒子亦六と中者にゆとりの小山之君さう。けあて幸哉く
 乳母兒の亦六とら者當地は位は。あつるゆえ力にせんやとさう。ひよ

存せどして大日鷲さ父亦助も金剛山まで殺されしと語りたれば
 さてへ彼村と騒一いつかりの佛々めて突の佛々へ我は殺されし汝が
 父も同夜に非業に死せしと語りぬも皆さかひの涙の種ありたり
 於三輪の食支とそのふまじて小山三とりてみ一亦六にむらひてかろ
 小蛇と雉の克と語りたるに亦六小蛇の断をりしと見るに黒斑
 の鱗のうて前程見るとうづみだれを益怪とて取捨たりこれ此小蛇の
 前の年鳥部野小會合せ一悪霊のうちに不破伴九瀧門小蛇とあり
 小山三に災をぞしとひし詞は符合せんばこそ伴九瀧門が怨魂乃
 化したるのあて小山三が所縁の家小まを災せんこそしつるらん是より
 小山三のまがく此家に逗留するが亦六夫婦の渉至人の落目なればと
 万更に心とつけていつこのりくりてみ一れば小山三の大日カと得て

喜ふこと限あり。さて又かの雉の家めぐるの竹林とるれど放し飼の
 やうにありなれば。お三輪のうに憐て朝夕餌とりのくくろるが呼ばつて
 出来り。杉太郎によく馴親て平日の戯弄とありにたり。不思議あり
 此雉偏目あり。これにも必ずそれあり。次の巻と讀得てとるべし

本朝醉菩提後映中冊終



